

7 高病原性鳥インフルエンザ発生を想定した

埼玉県防疫演習

川越家畜保健衛生所

○森田 梢・加島 恭美・山井 英喜

I はじめに

高病原性鳥インフルエンザ(以下、本病)は伝染力が強く、死亡率の高い伝染病であり、ひとたび発生すれば養鶏産業に多大な影響を及ぼす。

現在でもアジアを中心に世界中で発生しているなか、物流のグローバル化や渡り鳥の飛来等により、国内への侵入・発生の危険は常に高い状態にある。

埼玉県では、本病発生時の初動防疫を迅速かつ適切に進めるための体制を強化する目的で、防疫演習を実施した。また、演習終了後にはアンケート調査を行い、今回の成果と今後の課題を検討したのでその概要を報告する。

II 防疫演習の概要

1 日時

平成25年11月13日(水) 10時から16時

2 場所

深谷市花園文化会館『アドニス』、JA全農さいたま北部総合センター内駐車場

3 参加者

142人

(生産者25人、市町村24人、関係団体・民間11人、獣医師4人、
関東農政局4人、他県14人、本県60人)

4 内容

机上演習、実地演習

III 机上演習の内容

鳥インフルエンザの症状や発生状況等の概要、異常鶏の発生通報から一連の防疫作業の流れをスライドにより説明した。また、生産者に対しては特に飼養衛生管理基準の遵守、早期通報の重要性や発生農場等への支援策を強調した。

IV 実地演習の内容

1 健康診断

保健所の協力を得て、参加者を代表した数名が医師、保健師による診察、血圧測定を受けた。(図1)



図1 健康診断

2 防疫服の着用

家畜保健衛生所職員による防疫服着脱の実演を行い、注意点を伝えた後、参加者も実際に防疫服を着用した。防疫服は二枚重ねて着用、袖口、ファスナーの合わせをガムテープで目張りし、ゴーグルやマスクも着用するなど実践的な方法で行った。

(図2)



図2 防疫服の着用

3 移動

防疫服を着用したまま、借り上げバスで3キロ離れた仮設農場に移動した。(図3)



図3 バスでの移動

4 仮設農場での作業

仮設農場ではコーンとコーンバーを使い汚染区域と清浄区域を分け、テント、折りたたみ机等で仮設鶏舎、靴置き場、救護所等を設置した。また、除染テントとして、農林水産省備蓄の一度に4人が利用できる大型テントを使用した。(図4)

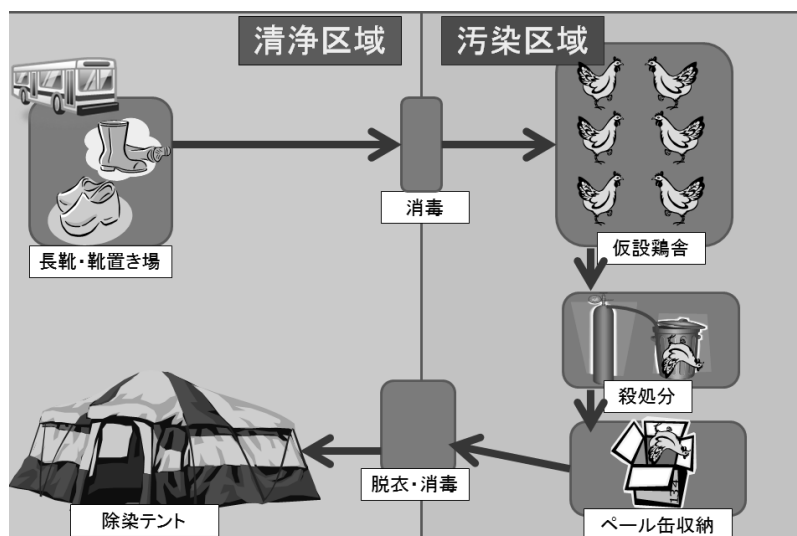


図4 仮設農場の見取り図

まず、参加者は靴置き場で長靴に履きかえた後、踏み込み消毒槽等で消毒してから汚染区域に入った。

次に仮設鶏舎に入り、実際に生きた鶏をケージから取り出し、殺処分用のペール缶に移した。

殺処分作業は、鶏に似せて1つ1.5kgの重さで作った模擬鶏を用い、炭酸ガスの注入により行った。注入後、焼却処分用のペール缶に入れ替えた。

有事の際には、殺処分後の鶏を、羽数確認の為に10羽ずつ一梱包にすることから、模擬鶏も焼却処分用のペール缶に10個ずつ入れ、その重さも確認した。(図4、5)



図4 生きた鶏をケージから取り出す作業



図5 模擬鶏を用いた殺処分作業

仮設鶏舎での作業が終了した後、再び消毒、防疫服の脱衣を行い清浄区域に戻った。その際、ゴーグルを外した後、介助者が一枚目の防疫服の背中をフードまで切り開き、汚染された外側に触れないように袖を引っ張り脱衣させた。(図6)



図6 防疫服の脱衣

その後、参加者は除染テントに移動し、テント内で内側の防疫服を脱いだ後、シャワーを浴び、新しい服に着替えてテントから退出した。(図7)

最後にバスで集合場所に移動し、演習は終了した。

実地演習は2グループに分けて行い、それぞれの待ち時間に、平成17年度に県内で本病が発生した時の記録映像を上映した。



図7 除染テントでの着替え

V 演習終了後のアンケート

1 参加者へのアンケート結果

机上・実地演習共に、内容を『十分』または『どちらかといえば理解出来た』が合わせて95%であった。

自分の役割についても『十分』または『どちらかといえば理解できた』が98%と高い割合であった。また、演習の必要性についても『必要だと思う』が93%と高い割合であった。

自由記述の部分で、今回の演習の良かった点は『防疫作業の一連の流れが理解出来た』、『養鶏農家を含めて関係者が一体的に取り組むことができた』、『防疫服の着脱の手順を理解出来た』、『実際に生きた鶏を扱えた』という意見があがった。

改善した方が良い点は『資材が不足し、仮設農場で汚染区域と清浄区域の区切りが分かりにくかった』、『防疫服着脱の実演は壇上で足元まで見えるようにしてほしい』、『会場の室温管理や設備等が不十分だった』等の意見があった。

防疫作業の不安な点は『夏の暑さ、体力』、『従事者のストレス、ホコリ、臭い対策』、『従事者による外部へのウイルス伝搬』等の意見があった。

2 主催者の意見

健康診断については『健康診断を受ける代表者以外の参加者は、何が行われているか良くわからないので、マイクを使うなど工夫した方が良かった』、防疫服着脱実演については『実演者の足元や細かい部分が見えづらかったので、壇上で行うなど工夫が必要であった』、殺処分作業については『より現実的な作業にするために、1ケージに複数の鶏を入れた方が良かった』、防疫服の脱衣については『介助者が少なく、混み合ってしまった』、『作業従事者の流れが1列になるような設営が必要であった』、その他として『机上演習と実地演習会場間の連絡系統が明確でなかった』という意見があった。

VI 今回の成果と今後の課題

今回の演習は、防疫服の完全装備、生きた鶏を用いた作業、除染テントの使用により作業のイメージが明確化し、臨場感の溢れるものになった。

参加者へのアンケートでは、『作業内容や自分の役割が理解出来た』という回答が9割以上を占め、当初の目的は達成できたと思われる。

一方、室温管理や設備等、会場の環境整備に対する意見があり、実際の有事の際にも考慮すべき点として明確になった。

生産者も参集し、飼養衛生管理基準の遵守や早期通報の重要性、発生農場等への支援策を説明したが、初めて参加した生産者が多く、防疫意識の強化につながった。今後はさらに多くの生産者が参加する演習としたい。